

池田喬氏の書評に対するリプライ

三浦 隆宏

拙著『活動の奇跡——アーレント政治理論と哲学カフェ』に対して、池田喬氏（以下、池田さん）から長文の書評をいただいた。じつは池田さんに評者をお願いしたのは私である。面識のない者からの（本誌の編集代表者である奥田太郎さんを介しての）突然の依頼に快く応じてくださった点にまずは深く感謝申し上げたい。

正直なところ、池田さんの書評を読むのは怖かった。あとがきで昨今の「哲学対話」ブームや「哲学プラクティス」をそれとなく揶揄した者が著わした本である。日本哲学プラクティス学会の事務局代表を務め、勤務先の明治大文学部で「哲学プラクティス」の授業を本格的に導入した池田さんがその一文を目にして、気分を害さなかったはずがない。また、一般的に学術雑誌に掲載される書評では、評者はなんとかして（悪く言えば）粗探しをしようとするものである。拙著には数多くの「粗」があるはずだが、池田さんは敢えてそれらを言挙げすることなく、拙著の可能性を最大限に引き出すコメントに徹してくださった。私は池田さんのこの姿勢に、哲学対話の「ファシリテーター」としての振る舞いを見て取ったしだいである。

とりわけ私が嬉しかったのは、最後の「本書のスタイルについて」で記されていた文言である。私は過剰なまでにアーレント以外の言葉を拙著のなかで引用・参照しようと試みた。そして、哲学カフェの参加者や勤務先の学生らの発言や感想と書かれたテキストとを等価なものとして扱おうと心がけた。それを池田さんは「様々な人々の言葉のリレーで本書の言葉は一つの連なりとして成り立っている」と記し、拙著の「書き方が対話的」と評してくださった。

さらに、すでに世に多く出ている哲学カフェ本についての私の不満——それは、それらが「教科書的な一般論や啓蒙的な一般書に近いもの」ばかりだということである——をきちんと汲んでくださり、拙著をそれらとは全く異なる「自問自答の旅のようだ」と形容してくださった。たしかにあ

とがきで挙げた初出一覧を眺めているとじつに長い旅をつづけてきたものだと感慨を抱く。紆余曲折や挫折にまみれた拙著に温かい言葉の数々を寄せてくださったことに、ただただ頭を深く下げざるばかりである。

というわけで、拙著についての池田さんの要点の紹介やコメントに対して私からの異論はまったくない。とはいえ、これでは応答が終わってしまう。変則的ではあるが、以下では池田さんもおそらく耳にされたであろう哲学対話の場で最近起こったある出来事について記すことで、リプライに代えたい。

今年の3月29日に「最高の死をデザインしたいか?」という物騒な(というかセンスのない)問いを掲げた哲学対話がオンラインで(正確にはDabelという音声コミュニケーションアプリを用いて)開かれたという。私の知る限りでは、主宰者は哲学対話の場に何度か参加して、いつしか自身でもオンラインで対話の場を開くようになったようだ。そしてそこにある難病当事者の方が参加され、その主宰者の「高齢で寝たきりになりチューブだらけになるならば、モルヒネとか使って安楽死がしたい」という発言に代表される一連のやり取りに自分自身の生存が危うくされる思いをしたとのことである⁽¹⁾。

哲学カフェでこの手の発言に出くわすことはままある。拙著の補論2で振り返った中之島哲学コレクションでも、極端な物言いをされる方々がときどきいたものである(また、私にとって哲学カフェの原風景の一つとも言える、大阪大臨床哲学研究室の金曜6限授業の場であつて起こった「ロボット」発言事件も似たようなものだ⁽²⁾)。「なぜ人を殺してはいけないのか」という問いかけが以前にも物議をかもしたように、ときに周りの人をギョッとさせるような文言が「問題提起」として大手を振って(無邪気に)出される場合が哲学(対話)にはある。とはいえ、そういった場合、大抵はほかの参加者やもしくは進行役が異論を提示したり、発言や問題提起をメタ的に捉え直したりして、問題の次元を一つ上げたりするものである。だが、残念ながら今回はそうとはならなかったようだ。拙著の第5章でも引いた、過去の哲学カフェ

参加者の感想を援用するなら、「参加者に依存」する傾向にある(すなわち、進行役があまり介入しない)哲学対話の場では、やむを得ない面もあるのかもしれない。

同じく拙著の第5章で「哲学カフェの進行役は、哲学を専門的に勉強した人々に限られない」と記したように、私は大学で哲学を専門として学んだわけではない一般市民の方々が哲学対話の場を設けたり、進行役を担ったりすることには肯定的である。いまは削除されてしまったようだが、そのオンライン哲学対話の開催から一ヶ月後には、主宰者の方もお詫びと経緯と改善点を記した文章を公表している。ところが今回はそれでは事態が収まらなかったのか、私も以前に正会員として所属していたカフェフィロが5月17日に「人々の尊厳が守られる場を目指して」という文章をホームページ上で公表し⁽³⁾、池田さんも一時期在籍していた東大UTCPでセンター長を務める梶谷真司さんが、6月27日には自身のFacebook上で「哲学対話における「何を言ってもいい」について～哲学対話の主催者・参加者へのお願い」と題する文章を発表するに至っている⁽⁴⁾(なお、その間の6月1日には難病当事者の方も自身のブログで「HtGt哲学対話による『最高の死をデザインしたいか』エッセイ Vol.1」と題する文章を投稿している⁽⁵⁾)。

私はカフェフィロや梶谷さんの声明をたとえば言論の自由を危うくするものとして批判したいわけではない(ただし、両者にこの手の声明を期待した向きには賛同できない)。両者が記している事柄は当たり前のことだからだ。私がむしろ残念に思うのは、今回の件が当事者どうしの対話では收拾がつかず、「哲学対話の加害性」や「差別(ヘイト)」といった語とともに、あたかも主宰者が「加害者」で、難病当事者の方が「被害者」であるかのように、分断されて認識されてしまった点である。拙著のなかで私は、「私たち」という感覚を育んでゆく契機として哲学カフェを捉え、「助け合いの精神」で対話が進んでゆくこと、さらには「その場にいる者全員で」対話を動かしているのだと説いた。また、「熟議」タイプの対話の場と異なり、自然発生的に始まった哲学カフェは「誰もがどこでも開くことができ」、「この低コスト

でかつ不完全なありようは、しかし逆説的にも、〔中略〕参加者から〈受援力〉とでも呼べそうな力を引き出すことをも可能にしている」のだと論じた。あるいは哲学カフェの場では、意見を交わし合うことで、その人の私的な属性に関わる「何であるか“what”」とは異なる、「誰であるか“who”」が開示されるのだと、アーレントを援用しつつ述べた。しかし今回の事例では、「難病」や「被害者」という属性が、その後の（主宰者を非難する側と擁護する側とのあいだの）平等な意見のやり取りを、「二次加害」といった語とともに阻んでしまったとの印象を受ける。対話の場で生じた問題を当事者自身らの対話によって解決することができず、第三者（あるいはこの境界の権威）の「声明」によって幕引きが図られようとしている点を危惧するのだ。とはいえ、これ以上贅言を弄するのはやめておこう。これでは私自身も声明を出しているのと変わらないので。個々の場から記された「お詫び」やエッセイ、呼びかけや「お願い」は、現状では互いに交わりあうことなく孤立している。

思えば、拙著で記した哲学対話の場はすべて対面でなされていた。その意味で私が論じてきた哲学カフェは、すべてコロナ禍以前のものである。新型コロナウイルスは人どうしが集まり面と向かって話し合うことを「濃厚接触のリスク」だとしてしまった。その一方で、オンラインでの哲学対話が急増することとなったわけだが、そこでは果たして「活動の奇蹟」は起こりうるのだろうか。アーレントが「人間関係の「ウェブ」と述べていた点を踏まえると、ウェブ上でなされる哲学対話も「活動」の一種だと見てみたいような気もする。しかし、(Dabelのように) 音声のみによってなされる対話は、声や語り口以外の「非言語メッセージ」をかなりの程度縮減してしまうのではないか。オンラインは〈カフェ〉になりうるのか。——これらの問いや戸惑いが、この一年あまり、私の喉の奥に刺さったままである。そしてまた、「差別」を主題とした共訳書⁽⁶⁾を刊行し、「言葉の加害性」をテーマとした論文⁽⁷⁾をも発表している池田さんは、今回の件についてどう思われたのだろうか。そう遠くない未来に話し合えることを願っている。

注

- (1) なお、この件については、以下のブログが詳しく記述している。「【投稿】「死」に関する、ある哲学対話での一件について～その1～」(<https://www.hatoba-de-dialogue.net/2021/05/information20210514.html>)、「【投稿】「死」に関する、ある哲学対話での一件について～その2～」(<https://www.hatoba-de-dialogue.net/2021/06/information20210605.html>) 2020年7月7日最終確認(以下、ウェブへのアクセスはすべて同じ)。
- (2) 詳しくは以下を参照してほしい。鷺田清一監修 本間直樹・中岡成文編『ドキュメント臨床哲学』大阪大学出版会、2010年、12-31頁。
- (3) <http://cafephilo.jp/news/philosophy-1987/>
- (4) <https://www.facebook.com/1600135633/posts/10223576695517716/?d=n>
- (5) https://kuriko-s.hatenablog.com/entry/2021/06/01/171153?_ga=2.156558139.100064880.1622525795-1529444466.1622525795
- (6) デボラ・ヘルマン『差別はいつ悪質になるのか』池田喬・堀田義太郎訳、法政大学出版局、2018年。
- (7) 池田喬「ただの言葉がなぜ傷つけるのか——ハラスメント発言の言語行為論的探究」、日本哲学会編『哲學』第69号、2018年、9-20頁。